



学校だより

彩雲燦燦



令和8年が始まりました。あっという間に3週間がたちますが、私のお正月の楽しみの一つが、元日恒例のウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートをテレビで観る事です。全世界150か国以上5千万人の人が視聴している一大イベントで、今年で86回目を迎えました。「今年は誰が指揮をするのか？」ということもファンの中での大きな関心事で、これまで日本人で指揮をしたのはたった一人、故小澤征爾(おざわせいじ)さんだけです。今年、アメリカのメトロポリタン歌劇場の音楽監督等を務めたヤニック・ネゼ＝セガン氏(北アメリカ大陸出身者として初)が指揮者として登場しました。さて、このニューイヤーコンサートでは、「ワルツ王」とも呼ばれるオーストリアの作曲家であるヨハン・シュトラウス二世の作品を中心に演奏されます。代表的な楽曲である「美しく青きドナウ」や「ラデツキー行進曲」などは、皆さんもきっとどこかで耳にしたことがあることだと思います。ただ、ウィーン・フィルもこれまでの伝統を重んじつつ、変化が見えてきています。昨年の演奏会では女性作曲家の作品が初めて取り上げられ、ウィーン・フィルの大きな変革だったと感じましたが、今年はヨゼフィーネ・ヴァインリヒとフローレンス・プライスという二人の女性作曲家の作品が含まれていました。そしてそのうち一人フローレンス・プライスは、アフリカ系アメリカ出身の作曲家であるということ。プライスは様々な偏見や差別を受けながらも20世紀前半のアメリカ音楽の一面を築いています。今回の演奏会から感じられたこと、それは人種や性別などの壁を乗り越え、多様性を認め合う世界を音楽の力でつくっていこうというメッセージでした。私たちの周りには偏見や差別があります。偏見や差別のない世界をつくる担い手は自分です。情熱と勢いに満ちた飛躍の年だと言われる午年だからこそ、太宰府西中のみんなが互いを認め合い、支え合い、助け合い、励まし合うことで笑顔と愛があふれ、自分を思い切り表現できる学校を「みんなで」「つながって」つくりましょう！

だれもがいきいきかがやく社会をつくるために

昨年12月に太宰府市で設定している人権学習「9ヶ年カリキュラム」を中心にすえながら各学年で授業を実践しました。1、2年生は「識字学級」の学習をしました。差別や貧困等で、学校に行きたくても行くことができず文字を学べなかった人たちが文字を取り戻す場として始まった識字学級。文字を学ぶことで社会にある差別を見抜く力が育ったり、差別に困る人をなくしていけたりすることにつながることを学びました。3年生では「統一応募用紙」の取組を学習しました。本人の責任ではない項目(本籍や家庭の状況等)が含まれていた社用紙からその項目を除いた統一応募用紙が制定されたことを学習した後、「ある会社の面接で」という資料を用い、「自分だったら」どうするのかに焦点を当てながら学びを深めていきました。「自分事」として学ぶことで、自分の中にある差別意識に向き合い、差別に気づき、差別を許さない社会をつくるため自分がどう行動するかについて考えることができた意義ある授業となりました。保護者の皆様に参観をしていただき、ともに学ぶよい機会となりました。



「識字学級」の学習をしている授業の様子

今年も太西星が大活躍しています！

後期後半開始の日の全校集会後にも部活動の活躍、特別支援学級の生徒が出品した美術展における入賞などを披露する表彰式を行いました。その中で、学校全体が表彰を受けたものがあります。それはAIドリルへの取組に対するものでした。本年度、太宰府西中は学力向上に向け、AIドリル「キュビナ」に取り組んでいます。特に基礎・基本の定着のため、朝学習や夕学習をはじめ、家庭学習や授業の中で活用してきました。その取り組んだ問題数が全国の中で上位3%に入ったというものでした。学びに向かう力は学力の土台です。そのことを学校として表彰されたことは何よりうれしいことでした。



福岡県立美術館での展示



AIドリルの表彰状